

2020.04.19

「罪ある人間の悲惨その1」

ローマの信徒への手紙 1 章

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。

1:19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。

1:20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。

1:21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。

1:22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、

1:23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。

1:24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。

1:25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。

+++++

1) 神はご自分を啓示なさる

2) 神を拒む人間の愚かさ

\*真理を妨げる生き方 1:18

「真理を妨げる」という意味は「自分の気に入らないものをゴミ箱に入れ、その上に座り込んで中身が見えないようにする」ような態度をとることです。

「神の真理」を妨げ、神の真理を押し隠し、まるで何もなかったような態度で、神の真理を無ものにするような態度を取り続けることです。

その態度が霊的・道徳的・理性的な問題を生み出してしまっているのです。

まず、

1/ 霊的な堕落・罪

1:19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。

1:20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。

ローマに住んでいる人たちにとっては、ユダヤ人と違って宗教的な歴史があるわけではないですから、私たちにはユダヤ人のようにはわからないのだという反論があったかもしれませんが。

しかし、パウロは「神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」

というのです。本当に冷静に山を見、星を見、月を見るとき、それらの出来事の中に神を感じ、神を知ることができるというのです。

詩編 8 篇には

「8:2 主よ、わたしたちの主よあなたの御名は、いかに力強く全地に満ちていることでしょうか。天に輝くあなたの威光をたたえます

8:3 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き報復する敵を絶ち滅ぼされます。

8:4 あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。

8:5 そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。」とあります。

しかし、人々は、そういう畏敬の念をゴミ箱の中に押し詰め、その上に座り込んでふたをし、神のことなどわからないと言い出しているのです。

そして、自分たちに都合の良い神々を作り出し、それを神として礼拝している堕落・罪が描かれています。

さらに、

2/道徳的な堕落・罪

1:24 そこで、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。

1:25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。

とあります。

神の真理を押し隠し、神の心ではなく、神の願いではなく、人間の欲望を最優先して、やりたい放題、自分勝手に自分たちの体を辱める行為にふけたというのです。

そこには、靈的、理性的な押さえが効かない欲望だけが暴走するような表現が描かれています。

その出発点は神への「不信心」と「不義」の心と態度。神の思いに心が向けられない罪の力によるものです。

1:26 それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。女は自然の関係を自然にもとるものに変え、

1:27 同じく男も、女との自然の関係を捨てて、互いに情欲を燃やし、男どうして恥ずべきことを行い、その迷った行いの当然の報いを身に受けています。

よく言われることですが、いわゆる同性愛の問題がここに書かれています。しかし、これは神の怒りの表明として描かれています。ですから、彼らの心には神の言葉が入り込む余地がない状況です。

それを考えると、私は彼らを断罪する立場にないなと思います。彼らに対して「もっとも心を痛めているのは神ご自身」であり、「神の心は、彼らの行為を生み出しているその不信心と不義」についての気づきなのだと思います。

さらに

### 3/理性的な墮落・罪

1:28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。

1:29 あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、

1:30 人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、

1:31 無知、不誠実、無情、無慈悲です。

1:32 彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを

行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。

+++++

### 3) 神の怒り

神の怒りは「顔を真っ赤にして怒る」というのとは違います。むしろ、もう少し怖い感じです。

大事な言葉が三回でてきます。

1:24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ

1:26 それで、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせられました。

1:28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、

いわば、神は「あなたがそれだけ私を無視し、蓋をし、私の心を傷めるなら、そのまま、勝手に続けなさい」と言い渡してしまっているのです。

この「不潔にまかせられ」「恥ずべき情欲にまかせられた」「無価値な思いに渡され」たとしたら、「悔い改めること」も「立ち返ること」も「新しい希望を見出すこともできないままになる」ということなのです。

私たちが、自分の罪の状況に気づき、神の心を痛めていることに気づき、自分がまったく神の心からの外れな発想や行動をしていることに気づくのは、まさに「神の恵み」なのです。神の恵みの「タッチ」「啓示」、神の側からの近づきがなければ、私たちは靈的、道徳的、理性的に神の前に「真っ直ぐ立つこと」ができないのです。

今、私たちが穏やかに「神を礼拝できるのは」イエス様が、これらの「不信仰と不義」によってもたらされた悪のすべてを十字架に引き受けてくださったからです。

2:22 「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」

2:23 ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。

2:24 そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたち

が、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。

2:25 あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

大きな恵みが届いたのです。